2Up-4

在日外国人の住まい方に関する予備的研究

日建設計　○池上明　　昭和女子大　竹田喜美子

【日的】和洋折衷の日本の住居の中で在日外国人はどのような住まい方をしているのか、またそれは自国での住まい方とどのような違いが見られるのか。その共通点と相違点の比較によって彼らの日本の住様式に対する評価を浮き彫りにし、現代の日本人が抱える住生活の問題点を明かにしていく。【方法】主に欧米出身の在日外国人３０名を対象に、①空間属性、②履床様式、③起居様式、④家具、⑤食事、⑥接客の６項日を日本と自国の場合に分けてアンケート調査とインタビューを行い、集計結果を比較して考察を行った。また各対象者の日本での住居と自国での住居の平面プランを作成し、その比較からも考察を行った。【結果】日本ではほぼ全員、自国では半数以上の対象者が室内で靴を脱いでいる。日本では“玄関”という空間が容易に認識させているが、自国では衛生的行為として浸透している。但しフォーマルな場では失礼な行為であると考えている対象者が多くいた。団らんの時“ユカ坐”をする対象者は日本では６割、自国では４割弱である。これは日本での居住空間がイス坐家具の所有を許容しないことが影響しており基本的にユカ坐を好まない傾向が強い。日本でのユカ坐はカーペットの上の方が好まれており和室の与える心理的な影響はあまりなく、自国ではかなりカジュアルな時に限られている。“ホームパーティー”を開くか否かは日本・自国問わず個人差が大きいが、家が遠いとか狭いので開きにくいという意見もあった。このように集計結果を比較すると日本人と同じ行為をしていてもその意識は異なっていることが多く、進んで日本の住様式に順応するというよりは各自が感じる問題点を合理的な選択で解決し、独自の住まい方を確立している傾向がうかがえた。